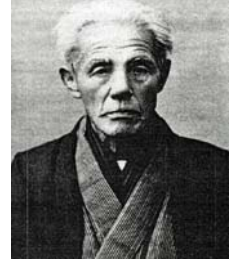


今回は松本藩士出身人物、松原葆斎・浅井洌についてお尋ねしますのでお答え下さい。

- 1、松原家は代々□□をもって藩主に仕(つか)えていた。衢(ちまた:葆斎のこと)の父素庵有恒も父祖の業を継いで、小納戸格で禄を貰っていた。□□に入る言葉を次の中から一つ選びなさい。

- ① 用人 ② 医業
③ 祐筆(ゆうひつ) ④ 年寄



- 2、葆斎も代々の家業を継ぐべく江戸に出て学問を学んだ。弘化4年(1847)藩主光庸(みつゆ)に従って京都に行き、岡本甲斐守に就いて学んだ。また遠く□□に出向き家業を継ぐべき学問の習得に励んだ。帰藩してからは命を受けて仕えた。どこまで出向いたのか、次の中から一つ選びなさい。

- ① 高知 ② 佐賀 ③ 鹿児島 ④ 長崎

- 3、文久2年(1862)37歳の時再び江戸に行き、昌平黉(しょうへいこう:昌平坂学問所)で学んだ。考えるところあり、ひとの心を直す方がよいと身を立てる決心をした。さて、次のどの道で身を立てる決心をしたのか、一つ選びなさい。

- ① 医学 ② 地学 ③ 儒学 ④ 化学

- 4、昌平黉の経義係などを経て、明治3年(1870)昌平黉を改めて大学になるのにより、大学中助教として勤務した。帰藩して藩学の教官、県学の教官、明治5年学制が布告されて開智学校が創立されるとそこに勤務した。明治7年文部省編輯(へんしゅう)局報告課勤務十等勤務となり、10年辞職して帰国、53歳で北安曇郡池田小学校に勤務、11年には長野県師範学校松本支校兼十八番中学校教諭となって漢文の教授を受持った。同年□□を開いて、門弟を集めて漢学を教授した。葆斎の学徳を慕って県下から門弟が集結したという。□□に当てはまる言葉を、次の中から一つ選びなさい。

- ① 家塾 ② 進学塾 ③ 義塾 ④ 東塾

- 5、葆斎の残した書籍は数千巻あったが、子の栄(さこう)が全てを松本図書館に寄贈して、父の志を為した。その中でも注目されるものとして、右の写真にある書物である。この書物は何と呼ばれているか、次の中から一つ選びなさい。

- ① 後漢書 ② 四書五経
③ 論語 ④ 宋版漢書



6、浅井冽は、嘉永2年（1849）10月、信濃国筑摩郡北深志に生まれた。松本藩士大岩昌言（まさのり）の第4子で三男として誕生した。後浅井家に養子に入る。どこの町で誕生したか、次の中から一つ選びなさい。

- ① 鷹匠町 ② 北馬場町
- ③ 土居尻町 ④ 西堀町



41歳頃の浅井冽

7、冽の8歳から15歳頃は、松本藩士の子弟として、また藩士としてかかすことの出来ない武芸および漢学の習得時代といえる。この頃多くの師から武芸や学問を学んだ。次の中の人物の中で師として学ばなかった人を一人選びなさい。

- ① 大岩昌言 ② 豊島利恭 ③ 柴田利直としなつ
- ④ 木下尚江 ⑤ 多湖安貞あきやすき ⑥ 菅沼富次郎

8、後に崇教館（そうきょうかん）で算術や詩経・書経・史記などを学ぶ。さらに師範講習所で学び、卒業して訓導となる。24歳ころから37歳頃までは、開智学校や松本中学校に勤務して国語・漢文・歴史等を教えた。この頃新進気鋭（しんしんきえい）の青年教師の多くは、□□に参加していたが、冽も例外ではなく、結社の重要ポストとなり役割を果たしていた。次の中から参加していた運動を一つ選びなさい。

- ① 護憲運動 ② 自由民権運動 ③ 普選運動 ④ 白樺教育運動

9、38歳から78歳までは長野県尋常師範学校に勤務を命ぜられて、国語・漢分・歴史・習字などを担当した。明治32年（1899）6月信濃教育会雑誌153号に、長野県小学校唱歌「信濃の国」を発表する。作曲は同校教諭依田弁之助であった。しかし、雅楽調でリズムが緩やかであったためあまり歌われなかった。明治32年赴任してきた音楽教師が新に作曲する。テンポが速く軽快なリズムであったため歌いやすかった。師範の生徒から各地の小学校に広められ、歌詞も訂正を重ねたものが今県歌として歌われている「信濃の国」である。2回目の作曲者は、次の内誰か一つ選びなさい。



明治35年54歳の冽

- ① 北村季晴すえはる ② 高野辰之たつゆき ③ 野口雨情うしじょう ④ 中山晋平しんべい

10、「信濃の国」作詞の前後の冽は、多くの学校等の校歌等の作詞を手がけた。何校くらい（郡歌・村歌・団歌等含めて）作詞したか、次の中から一つ選びなさい。

- ① 24校 ② 45校 ③ 56校 ④ 66校

氏名		点数	
----	--	----	--